

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：34439

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13861

研究課題名（和文）19世紀イギリスの自由教育論争の再整理

研究課題名（英文）Re-examining the Controversy over Liberal Education in England in the 19th Century

研究代表者

本宮 裕示郎（HONGU, Yujiro）

千里金蘭大学・生活科学部・講師

研究者番号：30823116

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：T. H. ハクスリーとM. アーノルドはともに、古代ギリシャの精神を19世紀イギリスに取り戻すことで、人文主義的な教育に矮小化されていた自由教育を人間主義的な教育へと改革していたこと、そして、その改革を実現するために、真実への追求を介して知性と道徳性をともに涵養する知の体系として教養概念をとらえていたことを明らかにした。加えて、ハクスリーが、人間関係における社会的・関係的な道徳性を求めていたのに対して、アーノルドは、自己の内面に目を向ける個人的・内省的な道徳性を求めていたという差異が、教養概念の背後にある両者の人間観の違いによって生じていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自由教育の思想史において、ハクスリーは、プラトンから連なり知の追求に価値を置く「哲学者」の系譜、アーノルドは、イソクラテスから連なり知の表現に価値を置く「弁論家」の系譜という対立する立場にそれぞれ位置づけられてきた。本研究での検討によって、両者ともに、知の追求と知の表現のどちらか一方を選択していたのではなく、真実を介して、知の追求と知の表現を両立させる論理を組み立てようとしていたものであり、両者はまさに「哲学者」の系譜と「弁論家」の系譜を架橋する位置にいたこと、さらには、その架橋を可能にするものこそ、知の体系として知性と道徳性をともに涵養する教養概念であったことが明らかにした。

研究成果の概要（英文）：T. H. Huxley and M. Arnold both revealed that by bringing the spirit of ancient Greece back to 19th-century Britain they were reforming liberal education, which had been dwarfed by humanistic education. To achieve this reform, they saw the concept of culture as a system of knowledge that cultivated both intelligence and morality through the pursuit of truth. In addition, the difference between Huxley's search for a social and relational morality in human relations and Arnold's search for a personal and introspective morality that considered the inner self was caused by the difference in their views of human beings.

研究分野：教育方法学 教養論 学力論

キーワード：教養 自由教育 19世紀イギリス 科学 T. H. ハクスリー 文学 M. アーノルド

1. 研究開始当初の背景

現在、教養とは何かが改めて問われている。学力概念が、特に教育目標論(何を身につけるのか)や教育方法論(どのように身につけるのか)で中心的な位置を占めてきた一方で、教養概念は、権威主義的で古めかしいものとみなされてきた。しかも、教養への注目が集まる際には、拡大する実用志向に対する自戒と反省の意味が込められ、教養という名の幅広い知識によって、実用志向が狭めた視野を広げようとする意図が暗に込められてきた。

過熱する実用志向に対して、いわば冷却装置としての役割を担う教養概念の現状は、2000年代に入ってから変わりがない。2000年前後に起きた「学力低下論争」を受けて、2002年には中央教育審議会が「新しい時代における教養教育の在り方について(答申)」を出し、新たな教養概念を構築する必要性を説いた。しかし、この答申における教養概念は「人間形成や教育のありとあらゆる側面を含みこむ」幅広いものであり、多くの意味が込められすぎた結果、意味をなしていないとも指摘されている。この指摘を裏打ちするように、街中の書店や広告では、教養本や教養セミナーといった表現で、身につけておくべき幅広い知識を意味する程度のもので教養という言葉が紙面をにぎわしている。

こうした現状に陥っている要因の1つは、教養概念がもつ「広さ」にある。「広さ」は、教養概念の伝統的な特徴の1つであると考えられている。元来、教養という言葉は、英語の culture やドイツ語の bildung の翻訳語であり、生涯を通じて目指される人格形成を意味している。しかし、その特徴である「広さ」が、さまざまな物事に精通していること、いわば博識であることと同義のものとして扱われることによって、教養が知識の「広さ」に狭小化され、結果的に、人格形成とは切り離されて理解される事態が生じている。言い換えれば、知識の「広さ」がいかにして人格形成に寄与するのかを問う視点が失われてしまっているのである。

そこで、本研究では、19世紀中葉のイギリスで生じた自由教育論争の検討を通じて、知識の「広さ」と人格形成の関係を問うことを目指す。専門性の「深さ」を特徴とするドイツの bildung 概念に比べて、イギリスの culture 概念の特徴は、ジェントルマンという言葉に象徴されるように、社交性にある。社交的にふるまうためには、幅広い知識をもつことが求められ、自由教育の教育内容として、イギリスでは人文学を中心とする知識の「広さ」が伝統的に要求されてきた。しかし、19世紀の中頃には、国内外での政治的・経済的な変化を背景にして、自由教育の教育内容や自由教育自体の定義が問い直されることになった。こうした問い直しなかで、J. H. ニューマンや J. S. ミルといった当時のイギリスを代表する知識人たちが知識の「広さ」を人格形成へといかにしてつなげようと試みていたのか。この問いに答える形で、本研究では自由教育論争の各論者の主張を再整理することを試みる。

なお、研究開始当初は自由教育論争のさまざまな論者を検討対象とする予定であった。しかしながら、新型コロナウイルスの国際的な感染拡大の影響を受けて、史資料収集を目的とする渡英計画が頓挫したために、主たる検討対象を T. H. ハクスリーと M. アーノルドに変更した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教育目標論と教育方法論の両面から自由教育論争の意義を明らかにすることである。自由教育論争とは、教養を身につけることを目的とする自由教育の本質をめぐり、イギリスで展開された論争である。J. H. ニューマンや J. S. ミル、H. シジウィック、T. H. ハクスリー、M. アーノルドなど、当時を代表する知識人が主な論者であった。

自由教育論争は、教育内容の問い直しと自由教育自体の問い直しが行われた論争であった。論争が起きた当時のイギリスは、進むことのできる学校段階が社会階級によって決定されていた。特に、自由教育はエリート教育と同義であった。それは、中等教育段階のパブリック・スクール、高等教育段階のオックスフォード大学とケンブリッジ大学で受けられる、中流階級の子ども向けの文学中心の教育を意味していた。しかし、当時の自由教育がラテン語やギリシャ語といった古典語の形式や規則の単なる暗記に墮し、空疎化していたことに加えて、ドイツやフランスの急激な産業面の発展や H. スпенサーによる古典教育批判に後押しされて科学教育を要求する声が高まったことで、文学教育を擁護する立場と科学教育を推進する立場の対立という形で、自由教育の教育内容を問い直す動きが生まれた。

この動きと並行して、自由教育自体を問い直す動きも見られた。政治的には、貴族政治から民主主義政治へと移行する過程において、一部の労働者階級が新興資本家として中流階級の仲間入りを果たす一方で、資本家からの搾取に対して労働者階級が抱く不満は高まっていた。なかでも、労働者階級の子どもたちの多くは貧困と長時間労働に苦しめられ、その道徳的な退廃が社会的な問題とされていた。この問題に対する解決策の1つとして、労働者階級の子どもたちにも十分な教育機会を与える必要性が主張され始めた。こうした教育の大衆化の動きは、自由教育にも向けられ、自由教育を従来のエリート教育ではなく、すべての子どもに必要な教育としてとらえ直す動きが生じたのである。

自由教育論争では、このような二重の問い直しが同時に行われていた。しかし、先行研究では、各論者の主張の検討や紹介が行われてきたものの、二重の問い直しについては見過ごされてき

た。しかも、思想研究として理論的な観点から論争が扱われてきたために、各論者が自由教育を通じて、何を・どのように身につけさせるのか（教育目標・方法論）というカリキュラム・レベルでの議論が十分に行われてはこなかった。その結果、理論と実践の往還という、より包括的な視点を欠き、自由教育論争の全容を立体的かつ構造的にとらえることには成功してこなかった。そのため、本研究の学術的独自性は、科学教育推進派と文学教育擁護派をそれぞれ代表する論者である T. H. ハクスリーと M. アーノルドによる自由教育・教養論を、教育内容の問い直しと自由教育自体の問い直しという二重の問い直しに着目して、カリキュラム・レベルで検討し、自由教育論争の意義を明らかにするという点にある。本研究の完成により、知識の「広さ」と人格形成の関係が整理されるだけでなく、学力と教養が概念的に整理され、学力概念研究に対しても理論と実践の両面から寄与することになる。

3. 研究の方法

本研究では、イギリスの自由教育の変遷、特に、18世紀から19世紀にかけて、自由教育の目的が、社会的なもの(道徳性)から知的なもの(知性)へと質的に変化したことに注目して検討を行う。18世紀の自由教育が、社交場でのふるまいに代表されるように、知性が軽視された表面的な道徳性の獲得に陥ったことへの反発から、19世紀の自由教育は知性の獲得が主な目的とされた。知性が強調される一方で、新たな道徳性のあり方も模索されることになった。つまり、知性と道徳性の関係が改めて問われるなかで、自由教育論争は生じていたのである。そして、論争においては、自由教育のために必要とされる教育内容と自由教育自体の定義がともに問い直されることとなった。ただし、知性や道徳性について、各論者が共通の認識を抱いていたわけではない。各論者は、新たな知性や道徳性を模索しつつ、知性と道徳性の関係も同時に問うことになったのである。

そこで、本研究においては、ハクスリーとアーノルドの問題意識に焦点を合わせながら、以下の3つの問いに答えていくことを目的とする。まずは、両者は自由教育を誰にとって必要な教育と考えていたのか、そして、どのような知性と道徳性が必要とされることになったのか。さらに、知性と道徳性の関係を成立させるために、どのようなカリキュラムの提案を行ったのか。これらの問いに答えていくことを通じて、自由教育論争を立体的かつ構造的に整理し直し、その意義を明らかにする。最終的には、本研究での検討をもとに、教養概念における「広さ」と人格形成のあり方について新たな示唆を得ることを目指す。

4. 研究成果

先行研究では、自由教育の思想史において、ハクスリーは、プラトンから連なり知の追求に価値を置く「哲学者」の系譜、アーノルドは、イソクラテスから連なり知の表現に価値を置く「弁論家」の系譜という対立する立場にそれぞれ位置づけられてきた。

しかしながら、本研究での成果を踏まえると、両者の位置づけは改められる必要がある。ハクスリーとアーノルドは、当時の自由教育が中流階級の子どもたちを主な対象としていたことを問題視し、すべての子どもが教養を身につけることを求めていた。しかも、両者ともに、真実を絶えず追求するなかで、道徳的な行為として知が表現されると考えていた。ただし、両者が見いだした真実の在りかが異なっていた。ハクスリーは、自然の事実のなかに真実を見だし、自然法則を絶えず追求することによって、道徳法則が導かれると考えていた。一方で、アーノルドは、自分自身のなかに真実を見だし、最善の自己を絶えず追求することを道徳的な行為と見なししていた。それぞれにとっての真実の在りかは異なっていたものの、両者ともに、知の追求と知の表現のどちらか一方を選択していたのではなく、真実を介して、知の追求と知の表現を両立させる論理を組み立てようとしていた。両者はまさに「哲学者」の系譜と「弁論家」の系譜を架橋する位置にいたのであり、その架橋を可能にするものこそ、知の体系として知性と道徳性をともに涵養する教養概念であった。

さらに、両者の教養概念には、それぞれの間観が色濃く反映されていた。ハクスリーは、人間を自然の一部と一貫して見なし続け、アーノルドは、科学と文学の価値のすみ分けを進めるなかで、人間を自然から切り離していった。その結果、ハクスリーにとって、自然を追求することは人間を追求することと同義となり、アーノルドにとっては、自分自身の内面を追求することに価値が置かれることとなった。科学の新興によって、キリスト教で前提とされていた人間観に揺らぎが生じるなかで、両者は「人間とは何か」を問いながら、それぞれ異なる人間観にもとづいて教養概念を提示していたのである。

このように整理すると、19世紀イギリスでの自由教育論争におけるハクスリーとアーノルドの立ち位置がより明確となる。古代ギリシャにおいて、自由教育は自由人のための教育であり、パイディアと呼ばれていた。それは、人間性の全体的・調和的な発展を理想とする教育であった。しかし、ルネサンス期を経て、ギリシャ語のパイディアをラテン語のフマニタスに翻訳する見方が普及・定着するなかで、自由教育は、人間性の全体的・調和的な発展という人間主義的な要素を失っていく反面で、人文主義的な要素を色濃くしていった。19世紀に至るまでに、ヨーロッパ諸国の人文主義的なエリート教育として強固な伝統を形づくり、とりわけ、イギリスにおいては、19世紀に入って、科学の新興ともなう実用主義・功利主義的な自由教育を求める科学教育推進派との間に対立が生まれ、自由教育論争が引き起こされていた。自由教育のこうした経緯を踏まえると、それぞれの間観にもとづいて新たな教養概念を提示していたハクスリーとア

ーノルドを、科学教育推進派と文学教育擁護派にそれぞれ単純に位置づける見方は表面的と言わざるを得ない。むしろ、両者は、科学教育推進派と文学教育擁護派という異なる立場から、「古代ギリシャの精神」の再興を通じて、人文主義的なエリート教育と化していた自由教育を、人間性の全体的・調和的な発展を理想とする人間主義的な自由教育へと改革することを試みていた。

しかしながら、教養概念の背後にある人間観の違いによって、両者の教養概念も異なる方向性を有することとなった。両者ともに、子どもたちが教養を身につけることによって「いかにして生きるか」を問うようになることを望みながら、ハクスリーは、社会的・関係的な道徳性を求め、アーノルドは、個人的・内省的な道徳性を求めることとなった。イギリスの自由教育史を論じたロスブラットは、イギリスの自由教育の特徴について、教育内容が「一般的で幅広いこと」と、教育目的が「世界・自己と調和して生きること」という二点で整理している。この整理に従えば、ハクスリーとアーノルドは、「一般的で幅広い」カリキュラムにもとづいて、「いかにして生きるのか」を問う人生批評という名の教養概念をともに掲げながら、ハクスリーは世界との調和のあり方を示し、アーノルドは自己との調和のあり方を示していたとすることができる。つまり、両者の教養概念は、対立的ではなく相補的に、イギリスの伝統的な自由教育を象徴していたのである。

なお、今後の研究の準備として、本研究で得た知見をもとに日本の教養概念の歴史を概観したところ、19世紀イギリスの自由教育論争と日本の戦後の国民的教養論が、人文主義かつエリート主義からの脱却と、人格形成の方向性（個人的か社会的か）という二点で問題意識を共有していることに気づかされたため、今後の日本の教養概念研究の分析視覚として採用する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 本宮裕示郎	4. 巻 67
2. 論文標題 マシュー・アーノルドの教養概念に関する検討 科学観の変遷に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 165-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 本宮裕示郎
2. 発表標題 19世紀イギリスにおける初等教育カリキュラム論に関する検討：T. H. ハクスリーとM. アーノルドの比較を通じて
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第32回琉球大学web大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 南部広孝編著（本宮裕示郎分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 検証日本の教育改革：激動の2010年代を振り返る	

1. 著者名 本宮 裕示郎	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 224
3. 書名 イギリスの自由教育論争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------